

ボランティア活動への参加と文化的豊かさ

同志社大学 猿渡壮

1 目的

これまで、市民活動への参加と社会階層の関係についてなされた日本の研究では、高階層仮説および K パターン仮説の 2 つが提出されてきた。高階層仮説は、社会階層が高いほど市民活動への参加率が高くなることを述べた仮説であり、K パターン仮説は、上層と下層の両極で参加率が高くなる（中間層で参加率が低くなる）ことを述べた仮説である。

市民活動の中でも、特にボランティア活動についてなされた既存研究では、高階層仮説を支持するものが目立つ。また K パターン仮説にしても、上層において参加率が高いことを認める点では高階層仮説と共通しているため、何らかの“豊かさ”が市民活動に影響を与えているということについてはほぼ間違いないと思われる。

では、どのような“豊かさ”が市民活動に影響しているのだろうか。実はこの点に関しては、これまでそれほど明確な答えが提出されてきたわけではない。社会階層と参加に関する日本の研究において主として取り上げられてきたのは、収入、財産、本人学歴、職業、階層帰属意識といった変数に限られ、それぞれの変数の影響力も研究によって異なっている。このことが、どのような“豊かさ”が参加をもたらすのかという問いに答えることを難しくしているのである。そこで本研究では、社会階層に関わる要因をこれまでより広く検討することで、市民活動に影響する“豊かさ”とは何なのかを考えていきたい。

2 方法

分析に使用するのは、「2005 年 SSM 日本調査」によって得られたデータである。この調査は、全国の 20 歳～69 歳の男女を対象とし、層化二段確率比例抽出によってサンプルが抽出されている。有効票数は 5742、回収率は 44.1%である。

調査では、過去 5～6 年の間にボランティア活動をしたかどうかを尋ねられており、分析ではこの変数を従属変数とする。また独立変数としては、収入、財産、本人学歴、職業といったこれまで検討されてきた要因に加えて、(1) 文化的余暇活動などの現在の文化的豊かさに関わる変数や、(2) 親の職業や学歴、15 歳時の家の暮らしむき、15 歳時の家にあった本の冊数といった、出身家庭の文化的・経済的豊かさに関わる変数が検討される。

3 結果

分析を通して明らかにされたのは、現在および出身家庭の文化的豊かさがボランティア活動への参加とプラスの関係にあり、ボランティア活動が経済的豊かさよりも文化的豊かさによって影響を受けているということである。この結果は、ボランティア活動が文化的再生産の問題に関連づけられる可能性を示唆している。報告ではこの点も踏まえ、社会階層と市民参加の問題についての考察がなされる。